

# ミシェル・フーコーと統治性研究のアップデートはいかにして可能か ——重田園江著『統治の抗争史』と隣接諸分野の同盟——

西田尚輝

## I. はじめに

統治性研究はミシェル・フーコーの『安全・領土・人口』(1978)、『生政治の誕生』(1979)の分析枠組みに基づくアプローチである。このアプローチは、対象の時代や規模にとらわれず、集団や個人のミクロな関係や、国家や社会のマクロな関係を、権力と主体の相互構成という観点から捉える。そのため、歴史的事象から現代に至る権力と主体の複雑な関係を分析するのに有効な手段である。

こうした統治性研究は特に、17-18世紀の自由主義への流れを主要な分析対象とする場合がある。その対象は、法的権力や規律権力に対し、18世紀半ばに登場した自由主義の権力である。

本稿はこのような自由主義的統治のあり方を論じた重田園江著『統治の抗争史』を取り上げ、統治性研究の展開と今後の課題を論じる。本稿はまず、統治性研究の方法を整理する。そのうえで本書の内容を検討し、最後に統治性研究の今後の課題を論じる<sup>(1)</sup>。

## II. 統治性研究の方法

まずは統治性研究の方法を2つに整理し、本書の位置付けを試みる。

一つ目は、フーコーの枠組みを使った権力・主体・知の分析である。この方法は、*The Foucault Effect* (1991)や*Foucault and Political Reason* (1996)を嚆矢とし、近年では、現代社会論、思想史、社会学にとどまらず、政治学、国際関係論、ポスト植民地研究や、環境問題、ジ

ェンダー・セクシュアリティ、移民、バイオテクノロジー研究にも受容されている。なかでもWalters [2012=2016]は「適用主義」を避けながら、統治性研究を批判的に活用している。ここでは統治性研究はオープン・ソースのソフトウェアであり、枠組みと研究者は相互的な関係にある。

二つ目は、フーコーの統治性講義の再検討である。こちらは1990年代のコリン・ゴードンや重田の研究を除いて蓄積は少ない。こうしたなか本書の特徴は、統治性講義を特に自由主義的統治にかんしてフーコー内在的に整理・解釈した点にある。

## III. 『統治の抗争史』の評価

次に本書の内容の評価を試みる。本書は、17-18世紀の国家理性から自由主義への展開についてのフーコーの議論を政治・社会思想史から整理・解釈する部分(Ⅲ.1.)と、人口の誕生という観点から統計・確率史についてオリジナルな議論を展開する部分(Ⅲ.2.)に分かれる。

### III.1. フーコーの統治性講義のアップデート

本書はフーコーが扱ったテーマにかんする現在の研究状況を、政治・社会思想史の多くの二次文献に言及しながら整理し、そこからフーコーの視角の特徴を切り出している。さらに、フーコーの議論で展開が不十分であったり、その後の研究で相対化されたりした箇所は、安藤裕介や隠岐さや香らの知見を活用して補足し、フ

ーコーの統治性講義をアップデートしている。

また、フーコーの言う自由主義的統治は、社会的領域に拡散し、それぞれの分野の知と権力を持った専門家たちに担われるものだった。重田はこの観点から、国家・国家財政に結び付いた重農学派とは違って、商人・商業政策の行政官の立場から経済自由化を唱えたグルネーやグルネーサークルを、「知識人として新しいスタイルを創造した」人びととして捉え直している(重田[2018: 337])。

### III.2. 統計・確率史への貢献

統計・確率史研究の嚆矢は、1980年代のビーレフェルト大学のローレンツ・クリューガーらの確率革命の研究プロジェクトである。その後、セオドア・M. ポーターやロレーヌ・J. ダストン、イアン・ハッキングらは、数量化の技術を自然科学にとどまらず社会管理の実践において検討した。本書はフーコーの統治性講義をこうした後の研究と接続している。

第9章以降、人口の古代近代論争、パスカルとフェルマーの確率の論争、バルヌイとダランベールの予防接種の論争が掘り起こされるが、これが「抗争史」の名のゆえんであろう。さらにイギリス政治算術やドイツ国情学に比べて蓄積の少ないフランス確率論の研究は貴重である<sup>(2)</sup>。

また、フーコーの科学的認識論は知と権力の相互形成を論じた。重田はこの観点から、自由主義的統治と相関して登場した知に注目している。例えば、『フランス人口についての研究と考察』(1778)の分析を通じて、宗教・法・習俗にかかわる行政官僚・教養知識人の知と、統計資料の収集・分析にかかわる専門職の知が区分され、18世紀末の新たな知のあり方が析出されている(重田[2018: 226])。

## IV. 批判的検討

次に前章と同様、政治・社会思想史(IV.1.)と

人口の誕生と統計・確率史(IV.2.)から批判的検討を試みる。

### IV.1. 政治・社会思想史研究から

17-18世紀の自由主義への流れで注目されるのは、ポリスとそれを批判した自由主義的経済学である。しかしそこにはフォローしていない研究群(1)や批判が不十分な箇所(2)がある。

(1)ポリスについて、Kaplan [1976]は、18世紀前半のポリスは穀物取引自由化の価格安定への寄与を認識していたとしている。ポリス対自由主義的経済学という枠組みは依然維持できるのだろうか。これについて、重田の論じる穀物ポリスはポリス全体ではない。Napoli [2003]によれば、ポリスには物質的・実践的・統制的・恒常的な行政ポリスと、宗教的・伝統的・裁判的な司法ポリスがある。後者について喜安[2009]は、18世紀の都市の発展とともに、調停的ポリスが機動的ポリスへと変化するとし、Milliot [2013]は、18世紀半ば以降の経済の自由主義的改革の一方で、ポリスは下層住民や流入人口への監視・抑圧を強化していくとする<sup>(3)</sup>。こうしたポリスの変化と自由主義的経済学の登場はどう関係するのか。

次に、自由主義的経済学について、重田はフーコーとともに、イギリス経験論からホモ・エコノミクスが生まれ、レッセ・フェールが要請されるとしている(重田[2018: 386])。しかし近年、17世紀末のアウグスティヌス主義と自由主義的経済学の繋がりを論じる研究が出ている。例えばLafond [1996]は、アウグスティヌス主義の「墮落した人間」から「利己心の秩序」問題が発展し、自由主義的経済学が誕生したとしているが、こうした研究とはどう関係するのか<sup>(4)</sup>。

さらに近年、重農主義を政治的自由主義から論じる研究が出ている。Rothschild [2001]は、従来経済的自由主義から理解されてきたチュルゴの改革に「ロマン主義的自由主義」の出現を

見ている。Rosanvallon [1992=1995]は、重農学派の影響は経済ではなく政治において顕著で、その所有者市民論は、立憲議会の市民権構想の枠組みを築いたとしている。本書は政治的自由主義には言及していないが、自由主義的統治性とはどう関係するのか<sup>(5)</sup>。

また、第15章のエコノミーの概念史は、ルソーと『百科全書』にとどまり、物理学への言及がない。Schabas [2005]によれば、ギリシア以来の、エコノミーを自然界との物質的關係で捉える思想は、18世紀でも持続していた。しかし19世紀にJ. S. ミルらによって「経済秩序の脱自然化」が生じ、エコノミーが社会的關係としてのみ捉えられるに至った。一方、Georgescu-Roegen[1971=1993]や桑田[2014]によれば、熱力学は力学モデルの自然認識に変革をもたらした。そして熱力学に基づく社会エネルギー論は、エコノミーを再び自然界との物質的關係で捉えた。

(2)批判が不十分な箇所は、Hirschman [1977=1985]への依拠である。重田[2018: 382ff]はハーシュマンとともに、18世紀の経済的利益を求める貪欲の情念を他の情念に対抗させる戦略や、スミス以降の商業を社会全体の秩序原理とする戦略を論じている。しかし、重田自身も取り上げる森村[1993]によれば、18世紀フランスの多くの思想家は商業の危険性を訴え、商業社会の評価は著しく低かった(森村[1993: 251])。こうした記述はハーシュマンの議論と矛盾するのではないか<sup>(6)</sup>。

さらに、ハーシュマンは多様な言説を経済的利己心に向けて整理するなかで、シャフツベリーに始まる「自然的・社会的諸感情」の系譜を無視し、その結果スコットランドとフランスそれぞれの商業社会論の違いを見ていない。この点は本書にも引き継がれてしまっている<sup>(7)</sup>。

## IV.2. 人口の誕生と統計・確率史から

本書はイギリス政治算術、ドイツ国情学、フ

ランス確率論が1830年代にケトレによって大成され、学として確立するという流れは通説に沿っている。重田の主眼はむしろ、統計・確率学が人口や統治とどう結びついたかにある。しかしこの関心なら言及されるべき対象がフォローされていない。

まず人口について、第9章で言及されるのは、17世紀の博物学者ジョン・レイの『植物誌』、18世紀の博物学者リンネの『自然の体系』、マルサスの『人口の原理』にとどまり、そこから統計学と人口がどう繋がったのか曖昧である。これについて重田は、マルサスに影響を受けたダーウィンの『種の起原』などの進化生物学や、19世紀末の優生思想と生物測定学を論じていない。一方、Mayr [2001]は、個人のばらつきを決定する法則を解明する統計学に進化生物学が接続したことで、最も明確な「人口の思考」が誕生したとしている<sup>(8)</sup>。

次に統治について、フーコーは国家理性とポリスが国土と人民の統計を重視したことに言及したが、重田[2018: 266ff]は、ケトレが天体観測や人体測定を超えて、社会現象の法則性を導出したことにも触れている。しかし本書の議論はケトレに偏っており、例えば1830年代以降のドイツ社会統計学といった統計学の社会調査への応用には言及していない。長屋[1992]によれば、社会統計学は官僚機構の確立、統計データの充実を背景に、国民生活全般の悉皆集団観察とその体系的な報告を目指した。こうした事例などを踏まえ、統計学と統治の関係をより大きな文脈で捉えるのが望ましい<sup>(9)</sup>。

## V. おわりに

以上の批判点はあるが、本書は今後の統治性研究の参照点となるだろう。最後にこれからの課題を指摘する。

まず、統治性研究はそのポテンシャルにもかかわらず、対象を支配層の言説に限定してきた。

今後はより多様な言説を視野に入れ、権力・主体・知の関係を分析する必要がある。また、近年のグローバルヒストリーの方法を取り入れ、対象を時空間的に拡大していかなければならない。

最後に、統治性研究と規範のかかわりはもは

や不可避である。重田自身、『フーコーの穴』、『連帯の哲学I』、『隔たりと政治』を通じて、ポスト福祉国家のリスクを個人化・細分化する統治のなかで改めて社会的連帯の可能性の問いを発している。

これらは私たちの課題である。

## 註

1. 本稿は「重田園江著『統治の抗争史』『隔たりと政治』合評会」(2019年6月15日：東京大学駒場キャンパス)の評者の報告を修正したものである。当日『隔たりと政治』を担当した網谷壮介氏、ご参加くださった重田園江氏、森政稔氏をはじめとする方々に感謝申し上げる。
2. ジュースミルヒは「神の秩序を証明しようという強い宗教動機に基づく」(重田[2018: 246])との記述は、重田から「戦争やペストを神の摂理とする説をジュースミルヒは批判した」と訂正があった。
3. Noiriel [2001]は17-20世紀のポリスの個人特定技術の発展を論じた。
4. Robertson [2015=2019]はアウグスティヌス主義やエピクロス主義によって経済学が生じ、啓蒙はこの経済学に代表される「境遇改善への志向」であると論じている。
5. また、フーコーが論じたのは国家理性・ポリスから自由主義的経済学への移行だとすれば、Pocock [1975=2008]は共和主義からスミスの商業社会への移行で、Rosanvallon [1979=1990]は社会創設(社会契約論)から社会維持(経済学)への移行であろう。これらがどう関係するのかも論じられるのが望ましい。
6. 西田[2019]によれば、18世紀フランスでは商業は自律した社会領域とは看做されていなかった。
7. また、ルソーについて、重田は第15章でルソー対スミスの政治経済学という通説に従っているが、Hont [2015=2019]はホッブズの利己愛との格闘という共通の枠組みで両者を捉えている。
8. Sober [2008=2012]はダーウィンの自然選択説・共通祖先説を検証する統計的推論についての哲学的論争を分析した。Gould [1981=2008]はアメリカの人種多起源論や頭蓋計測学などを取り上げ、統計学と人種差別の関係を検証した。
9. 19世紀後半のドイツ統計学と社会改革について高岡[2011]を参照。

## 文献

- Georgescu-Roegen, Nicholas (1971) *The Entropy Law and the Economic Process*, Cambridge: Harvard University Press. =(1993) 高橋正立(他訳)『エントロピー法則と経済過程』みすず書房。
- Gould, Stephen J. (1981) *The Mismeasure of Man*, New York: W. W. Norton. =(2008) 鈴木善次・森脇靖子(訳)『人間の測りまちがい』河出書房新社。
- Hirschman, Albert O. (1977) *The Passions and the Interests: Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*, Princeton: Princeton University Press. =(1985) 佐々木毅・旦祐介(訳)『情念の政治経済学』法政大学出版局。
- Hont, Istvan (2015) *Politics in Commercial Society: Jean-Jacques Rousseau and Adam Smith*, Cambridge and

- London: Harvard University Press. =(2019) 田中秀夫・村井明彦(訳)『商業社会の政治学』昭和堂.
- Kaplan, Steven (1976) *Bread, Politics and Political Economy in the Reign of Louis XV*, The Hague: Martinus Nijhoff.
- 喜安朗 (2009)『パリ：都市統治の近代』岩波書店.
- 桑田学 (2014)『経済的思考の転回：世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』以文社.
- Lafond, Jean (1996) “De la morale à l'économie politique, ou de La Rochefoucauld et des moralistes à Adam Smith par Malebranche et Mandeville,” in Force, Pierre and Morgan, David (ed.), *De la morale à l'économie politique*, Pau: Publications de l'Université de Pau, 187-196.
- Mayr, Ernst (2001) “The Philosophical Foundation of Darwinism”, *Proceedings of the American Philosophical Society*, 145(4):488-495.
- Milliot, Vincent (2013) “Le système policier parisien (fin XVIIe-fin XVIIIe siècle)”, in Belleguic, Thierry and Turcot, Laurent (ed.), *Les Histoires de Paris (XVIIe-XVIIIe siècle)*, I, Paris: Hermann, 53-77.
- 森村敏己 (1993)『名誉と快楽：エルヴェシウスの功利主義』法政大学出版局.
- 長屋政勝 (1992)『ドイツ社会統計方法論史研究』梓出版社.
- Napoli, Paolo (2003) *Naissance de la police moderne: pouvoir, normes, société*, Paris: La Découverte.
- 西田尚輝 (2019)「18世紀フランスの『社会性』概念にかんする思想史的研究」『相關社会科学』28:17-35.
- Noiriel, Gérard (2001) “Les pratiques policières d'identification des migrants et leurs enjeux pour l'histoire des relations de pouvoir”, in Caroline Douki, M.-C. Blanc-Chaléard (ed.), *Police et migrants: France 1667-1939*, Rennes: Presses Universitaires de Rennes, 115-132.
- 重田園江 (2018)『統治の抗争史』勁草書房.
- Pocock, J. G. A. (1975) *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton: Princeton University Press. =(2008) 田中秀夫(他訳)『マキャヴェリアン・モーメント』名古屋大学出版会.
- Robertson, John (2015) *The Enlightenment: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press. =(2019) 野原慎司・林直樹(訳)『啓蒙とはなにか』白水社.
- Rosanvallon, Pierre (1979) *Le libéralisme économique*, Paris: Éditions du Seuil. =(1990) 長谷俊雄(訳)『ユートピア的資本主義』国文社.
- Rosanvallon, Pierre (1992) “Physiocrates”, in Furet, François and Ozouf, Mona (ed.), *Dictionnaire critique de la Révolution française, IV: Idées*, Paris: Flammarion, 359-371. =(1995) 河野健二(他訳)「重農学派」『フランス革命事典2』みすず書房.
- Rothschild, Emma (2001) *Economic Sentiments: Adam Smith, Condorcet, and the Enlightenment*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Sober, Eliot (2008) *Evidence and Evolution: The Logic behind the Science*, Cambridge: Cambridge University Press. =(2012) 松王政浩『科学と証拠』名古屋大学出版会.
- 高岡佑介 (2011)「統計学と社会改革：エルンスト・エンゲルの『人間の価値』論」『社会思想史研究』35:78-98.
- Walters, William (2012) *Governmentality: Critical Encounters*, London: Routledge. =(2016) 阿部潔(他訳)『統治性』月曜社.

受稿2019年9月4日／掲載決定2019年11月18日